

とうかいどうぶんけんのず

#1 東海道分間之圖 (東海道分間絵図)

作者：遠近道印 (おちこち・どういん 生没年不詳)

刊行：元禄3年 (1690)



📖 解題

■ 内容

一般に「東海道分間絵図」の名で知られ、距離1町を3分に縮尺(1万2千分の1)した街道絵図である。遠近道印が作成した精密な分間図を基に、絵師・菱川師宣が街道風景を描いて完成させた。



[K292/49]

5帖の折本に描かれており、江戸・日本橋より京・二条城までを収める。

当館所蔵資料は第5帖の末尾に「元禄参年」、作者名、絵師名が書かれているが、左端が切れていて板元は不明である。影印本『東海道分間絵図』(1960)では、序文の終りに「元禄参歳」、作者名、絵師名が書かれ、第5帖の末尾に「大門通新大阪町 板木屋七郎兵衛板」とある。一方『東海道名所記・東海道分間繪圖』(1931)に収録された同絵図は、第5帖の末尾に「元禄参年」、作者名、絵師名が記され、その左に「新和泉町 板木屋七郎兵衛」とある。このように同じ刊行年でも板元の住所が異なることについて、『東海道分間絵図』(上巻)の解説では、元禄2年の「江戸図鑑綱目」(『古板江戸図集成巻6』[291.03/17/6]所収)には、板木屋七郎兵衛の住所は『大門通り』と記しており、「新和泉町」の方が後刷であるとしている。元禄16年(1703)から板元は万屋清兵衛に変わった。

■ 作者

作者は遠近道印で、その素性は伝わっておらず、仮名とされる。明暦江戸実測図作成の統括者である北条安房守氏長とする説、その養子の福島伝兵衛

国隆とする説、富山藩の藩医・藤井半知とする説など諸説ある。有吉武貞の描いた「加陽金府御城下武士町細見之図」（金沢市玉川図書館蔵）の序「賀州金沢町割之図成之弁」には「図翁遠近道印ト云シ者、実ノ名ハ藤井半智トテ、越中富山ノ小臣タリ」という記述があること、富山藩士の名簿である「正甫公御代分限帳 元禄三庚午改」（富山県立図書館蔵）に「藤井半知 六十三才」と掲載されていたことなどから、その中では藤井半知が最も有力視されている。道印が藤井半知ならば、寛永5年（1628）の生まれとなる。

絵師は菱川師宣（1618? -1694）。通称は吉兵衛。号は友竹。安房の人。特定の師なく画技を習得し、江戸に出て歌舞伎や風俗などの肉筆画を作成し、浮世絵版画の開祖とされる。代表的な作品として「見返り美人図」などがある。



本文を読む

<複製>

「東海道分間繪圖」（『東海道名所記・東海道分間繪圖』正宗敦夫編纂 日本古典全集刊行会 1931）[K99/48]

「東海道分間繪圖」（『東海道分間繪図人倫訓蒙圖彙解題』正宗敦夫編纂 日本古典全集刊行会 1934）[K292/132]

<影印>

『東海道分間絵図』上下 遠近道印 古版江戸図集成刊行会編 中央公論美術出版 1960 [K292/122/1] [K292/122/2] [291.03/27/1] [291.03/27/2]



参考文献

矢守一彦「遠近道印についての新解釈—有沢文書等との関連において」（『日本海地域史研究』日本海地域史研究会編 文献出版 1982）[214L/3/4]

『図翁遠近道印 元禄の絵図製作者』深井甚三著 桂書房 1990 [K28/196]
古宮雅明「『東海道分間絵図』制作経過についての一考察—『作者』『絵師』『版元』の関与をめぐって—」（『神奈川県立歴史博物館総合研究報告 2011 『道中記』の研究』神奈川県立歴史博物館編 2011）[K06/110/2011]